

中世城館縄張り調査の意義と方法

千 田 嘉 博

-
- | | |
|------------------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 調査成果の史料化 |
| 2. 縄張り調査の位置 | 5. おわりに |
| 3. 縄張り調査の方法と図化表現 | |
-

論文要旨

中世城館の調査はようやく近年、文献史学、歴史地理学、考古学など、さまざまな方法からおこなわれるようになった。こうした中でも、城館遺跡の概要をすばやく、簡易に把握する方法として縄張り調査は広く進められている。縄張り調査とは地表面観察によって、城館の堀・土塁・虎口などの防御構造を把握することを主眼とする調査をいう。そしてその成果は「縄張り図」にまとめられる。

このような縄張り調査は、長らく在野の愛好家によって支えられてきたため、調査の基準が不統一である。そこで本稿では、縄張り調査の意義と方法を具体的に検討した。その結果、縄張り調査は測量調査や発掘調査がおこなわれる前の、仮説的な作業としてすべきであることを示した。縄張り調査と測量・発掘調査はそれぞれ段階の違う、補い合う調査だと位置づけられる。

つぎに、基準となり得る縄張り調査の方法を提示した。ここでは正確な地形図をベースに作図すること、簡易測量器や歩測などで測距を必ずすること、遺構理解のポイントになる虎口などを詳細に観察することを述べた。また成果図面の净書など作業は、考古学の手法に従ってすべきことを述べた。そして縄張り図を地域史解明の史料として活用する方法として、織豊系城郭の虎口を中心とした編年を事例に、考え方と作成のプロセスを示した。

これから縄張り研究は、城館研究を推進するさまざまな他の研究方法との協業を、一層推進しなくてはならない。その中で縄張り調査は、城館の防御性から中世社会を解明するという視点を、より鮮明にして研究を深化させるべきである。それがはじまりつつある、総合的な城館研究の中で、縄張り研究が果たすべき役割である。それぞれの研究分野から、異なる城館像を出し合い、討議することで、多様な面をもつ中世城館は、はじめてその姿を現わすであろう。